

カンファレンスにおける書き手の視点の分岐 Construction of branching viewpoints in writing conference

加藤好広*1・小林一貴*2・益子典文*2

KATO Yoshihiro, KOBAYASHI Kazutaka, MASHIKO Norifumi

1 問題の所在

木村 (2008) は作文カンファレンスを「生徒が自分自身で作文の問題点を見つけ、自分自身で推考できるようになるための足場づくりの場」としている。また、佐藤 (2018) はカンファレンスを「書き手が書きたい内容を明らかにし、どのように書いていくかを決定するために行われる対話や話し合い」とし、「自立した『書き手』となるための『足場づくり』の場」であると述べている。たしかに、カンファレンスを通して作文や書くことの着想が得られたり、問題点を整理したりすることができ、その結果、作文などを書くための「足場」を作ることができる。

この「足場」については、小林ら (2018) のように中学生を対象としたものがある。ただそこでは、「書くことの意識化」という言葉で議論されているが、その意識化の内実についてはさらに具体的な分析・考察を通して、何を要因として、どのようなカンファレンスのプロセスの中で「書くことの意識化」が起きているのかについて明らかにする必要がある。

本稿においては「カンファレンス」という行為 (もしくはその過程) 自体に焦点を当て、そこで生起しているいくつかの事象の分析と考察を行うことを目的とする。

2 実践の概要

カンファレンスにもとづく学習指導として、高校1年生を対象にして全5時間の単元を構成し実践を行った。授業者は第1著者である。

2.1 授業構成及び使用教材

カンファレンスに関する授業及び使用した資料 (実用的な文章) ⁽¹⁾ を以下に示す。

1時間目 AIやロボットの発達により、今後の労働環境や状況は大きく変化することが示された複数の資料を読み、レポート1「資料を読んで考えた問題点」の下書きを書く。

2時間目 レポート1「資料を読んで考えた問題点」の下書きをもとに、第1回カンファレンスを行う。3～4人の班を編成し、順番に下書きの内容を発表する。聞き手は発表者に質問したり、自分の意見を述べたりする。発表者はそれらに回答する。

3時間目 1時間目に配付した資料を読み、レポート2「自分自身がこれから身につけるべき力」の下書きを書く。

4時間目 レポート2「自分自身がこれから身につけるべき力」の下書きをもとに、第2回カンファレンスを行う。班及び実施方法は2時間目と同じ。

5時間目 2回のカンファレンス及び2つの下書きを参考にしながら、レポート1「資料を読んで考えた問題点」とレポート2「自分自身がこれから身につけるべき力」の清書を書く。

資料は以下の4つを使用した。それぞれの資料内容を簡単に説明する。

*1 岐阜大学大学院カリキュラム開発コース

*2 岐阜大学教育学部

ア Society5.0で実現する社会⁽²⁾

これまでの社会とSociety5.0で実現する社会の違いがイラストを含めて説明されている。Society5.0で実現する社会の例として、地方の過疎地域にドローンが荷物を運搬したり、ロボットや自動運転車が人（高齢者や障害をお持ちの方）の支援をしたりすることが挙げられている。

イ 人工知能やロボット等による代替可能性が高い労働人口の割合⁽³⁾

10～20年後に技術的に人工知能やロボットなどに代替される可能性が高い労働人口の割合を棒グラフで表している。対象の国とその割合は、日本（49%）イギリス（35%）アメリカ（47%）である。

ウ 人工知能（AI）の発達により、10～20年後に消える仕事・残る仕事（予測）⁽⁴⁾

人工知能(AI)の発達により将来の就業構造が「消える職業・低賃金業務」と「残る業務」のように二極化することを具体的な職業を挙げて説明している。前者には「物品の販売員」「銀行の窓口係」など、後者では「内科医・外科医」「警察・刑事」「宿泊施設の支配人」などがある。

エ 遠藤薫『ロボットが家にやってくる・・・人間とAIの未来』（pp.27-30, 33-34）

産業経済面からのAIやロボットに対するニーズとして「労働力不足の解消」「高度な技術を有する人材の必要性」「人件費削減のニーズ」「新産業育成のニーズ」の4点について、その理由と併せて記述している。また「ロボットの実用化に対する期待度」の表（棒グラフ）も記載されている。

2.2 ガイドライン

カンファレンスを行う目的を、自分の意見を「よりよくするために話し合う」⁽⁵⁾ためと伝え、具体的な進め方がイメージしやすいようにガイドラインを提示した。ガイドラインを示すことで、聞き手が語句の詳しい説明を発表者に聞いたり、別の考え（意見）を伝えたりすることができる。質問を受けることで、発表者が分かりやすい表現や説明をすることを考えたり、新たな着眼点（発想）を得たりできるようにした。また、「聞き手」の積極的な発話を促すことを意図して「質問する」ではなく、「漫才を行うように」「質問する（ツッコミを入れる）」とした。生徒に提示したガイドラインは以下の通りである。

- 1 発表内容に対して質問（ツッコミ）を入れる。
 - ・内容や語句に対して、「それはどういう意味か?」「具体的に言うと何か?」などと聞く。
 - ・内容に対して、「なぜそう思うのか?」「その理由は何か?」などと聞く。
 - ・内容とは異なる意見を伝える。「別の〇〇という考えもあるよ」
- 2 発表者は質問（ツッコミ）に対して回答をする。
 - ・発表者は下書きに質問（ツッコミ）と回答を記入する。
- 3 禁止事項
 - ・発表者の意見を否定する。非難する（相手が傷つくことはしない、言わない）。

また、5時間目にカンファレンスの内容を参考にして、下書きを修正したり、新たに書き加えたりして清書を書くことを伝えた。

3 研究の方法

3.1 データの収集方法

5つの班の机にICレコーダーを置き、カンファレンスの内容の発話記録を作成した。音声記録された学習者の聞き取り可能な全発話に対して、教師・学習者の発話内容をテキストに文字起こしを行った。作成した発話記録には発話番号及び発話者を記載し、誰が、どの段階で、誰に対して発話

したのかを記述できるようにした。

3.2 トランスクリプトの記号について

用いる記号は以下の通りである。

- [発話の重なり。音声为重なり始める時点を該当する2行にまたがる角括弧で示す。
- = 途切れのない発話のつながり。直後の=の後の発話につながっている。
- 空白 発話中の短い間。
- 、 「空白」よりもごく短い間。
- 。 陳述の区切り。
- × 聞き取り不能。
- h 笑い声

4 資料を読む「視点」

ここでは「視点」をキーワードとして、カンファレンスの過程において生じる2つの事象の分析と考察について述べていく。

1つ目は、資料に記載されている内容に対して疑問を持ち、資料とは異なる視点（解釈や意見）を持つ、「批判的な考察」について。2つ目は、資料に対する意見をもとにしながら、資料の示す「『読みの道筋』からの分岐」もしくは「幅広く、抽象的な話題」へと「移動する視点」について。

4.1 「当事者」と「『読みの道筋』からの分岐」について

本稿で用いる「当事者」という語句の定義を述べておきたい。「当事者（当事者意識）」もしくは「当事者性」という用語は社会科教育の研究分野において見られる。前者においては、身近な地域など、自分の周辺で「起こっている問題を自分自身の問題として捉え」ること⁽⁶⁾として使う用語としたり、後者を「問題への切実性を表象する表現」⁽⁷⁾と定義したりしている。本稿では「当事者（もしくは当事者の視点）」を他人事ではなく、話題としている「場」に身を置く者（の視点）、もしくはその問題に直面する者（の視点）と定義しておきたい⁽⁸⁾。

次に「『読みの道筋』からの分岐」について。本稿で取り上げた授業では、資料の読み取りを行ったうえでカンファレンスを行っている。読む行為について奥泉(2012)は「ディスコース(テキスト、本稿では資料に該当する:稿者注)のある特徴によって読み手はある読みの方向性(あるいは道筋)をたどり読んでいく」、つまり「読みの道筋」に誘われていくと述べている。たしかに、テキストや資料が書かれた状況や背景、意図を無視して読むことはできない。しかし、テキストや資料が示す「読みの道筋」に沿いながらも、ある時点で新たな「読み」、言い換えるならば、独自の解釈や意見を生み出すことがあるのではないか。本稿ではそれを「『読みの道筋』からの分岐」や「移動する視点」と呼ぶことにする⁽⁹⁾。

4.2 批判的な考察

第1回カンファレンスにおいて、AI（人工知能）やロボットによる接客について話題になったグループ（Om, Hs, Nk）のカンファレンス記録を引用する。

| | |
|---------|--|
| 99. Hs | なるんだけど まーなんかロボットだと なんて言うの。たとえばメイク用品だとするやん＝ |
| 100. Om | ＝あああ＝ |
| 101. Hs | ＝このリップの色はこれです。この色です。としか教えてくれないじゃんか＝ |
| 102. Om | ＝ああ詳しくね。どういう人に合うのか いうね |
| 103. Hs | ＝そう 販売員だとこれは××向けだよ、××向けだよみたいな |

| | |
|---------|--|
| 104. Om | 同じことしか言わないもんね |
| 105. Hs | そうそうそうそう |
| 106. Om | 入れられたことしか言わない |
| 107. Hs | でも会話しながら買うのが楽しんだよね＝ |
| 108. Om | ＝まあ醍醐味の人もあるよね。そうのも |
| 109. Hs | へへっていうタイプの人間とか |
| 110. Om | いるわけじゃんか うん うんそうだね |
| 111. Hs | ロボットには聞けないんだよ |
| 112. Om | うん、無理ね 人間の感情 |
| 中略 | |
| 123. Hs | あと、AIのロボだと絶対敬語じゃん |
| 124. Om | あーそうね |
| 125. Hs | 堅苦しい確かに |
| 126. Om | 絶対敬語、固い日本語 えっ、 買いにくってなるじゃん うんー うんー 確かにねー |
| 127. Hs | なんか楽しくねーなー買い物 それならわざわざ店に行かなくていいやん |

商品を購入する際の対応として、ロボットが対応する場合はプログラムされたことしか言わない（もしくは言うことができない）などの意見が出た。それに対して、人間が対応する場合は、その場（季節や相手の年齢など）に応じて商品を選んだり、紹介したりするという意見や会話をしながら購入することも楽しみ（もしくは醍醐味）であるという意見が出された。そして、ロボットには人間の感情を理解することができない、もしくは心の機微をとらえられないという意見に進展していった。また、「中略」以降では、AIやロボットによる接客で使われる言葉遣いは「敬語」や「固い日本語」であるため、買い物の楽しみが失われることが話題に出された。

カンファレンスの際に生徒が参考にしたのは、資料ウ「人工知能（AI）の発達により、10～20年後に消える仕事・残る仕事（予測）」であるが、この資料に載っている内容は「物品の販売員」や「コーヒーショップの店員」などのような業務内容に関わる名称や職業の名前のみで、なぜ消えるのか（AIやロボットへの代替がなぜ可能なのか）などの詳しい理由や考察などは記されていない。

以上の点から、OmとHsは資料に記述されている内容をそのまま受け入れたり、無批判に受容したりするのではなく、自分自身がAIやロボットの販売員に対応される「場」を想像し、そこに存在する「当事者」として資料を解釈していると考えられる。つまり、資料に対して「批判的な考察」を行う態度もしくは視点が現れていると言えよう。

この「批判的な考察」の視点はカンファレンスの他の箇所にも現れている。先と同じグループのカンファレンス記録を引用する。

| | |
|---------|---|
| 259. Hs | 手縫いの仕立て屋、ロボットがやったら手縫いじゃねーhhh |
| 260. Om | 確かにhhh |
| 261. Hs | 手縫いの良さ消えるどうしたって、 |
| 262. Om | 温もりねーよみたいね。 |
| 中略 | |
| 268. Hs | コーヒーショップの定員。イケメンが見れなくなる。どうしてくれるんですか。 |
| 269. Om | hh |
| 270. Hs | スタバでイケメン |
| 271. Om | にコーヒーを ワンチャンだってそこから出会いがあって結婚するかもしれないし＝ |
| 272. Hs | ＝そう ロボットと結婚しろってのかー |
| 273. Om | hhh |
| 274. Hs | スタバのカップに何か書いてもらえなくなります。 |

ここで話題になっている「手縫いの仕立て屋」(259. Hs) や「コーヒーショップの定員」(268. Hs)

も、資料ウで人工知能 (AI) の発達により「消える職業」の項目に分類されている。しかし、261. Hs は「手縫いの良さ」や262. 0m「温もり」について発話し、人間が手作業を行うことの価値や「中略」以降では「イケメン」との「出会い（さらには結婚）」について話題を展開させ、人と関わることの価値や必要性、または楽しみについて意見を出し合っている。ここにおいても資料に対して「当事者」の視点を持ち、「批判的な考察」を行っていると考えられる。この「当事者の視点」は、「批判的な考察」をする態度から芽生えると考えてもよいのかもしれない。また、資料の内容を読み取り、理解・解釈する視点と「当事者」として資料の記述内容を捉える視点（もしくは、批判的な考察を行う視点）は別々にあるのではなく、常に両者の間を往復していると考えられる。カンファレンスを行う中で二つの視点の間を往復しながら深められていくと考える。

4.3 移動する視点～「『読みの道筋』からの分岐」～

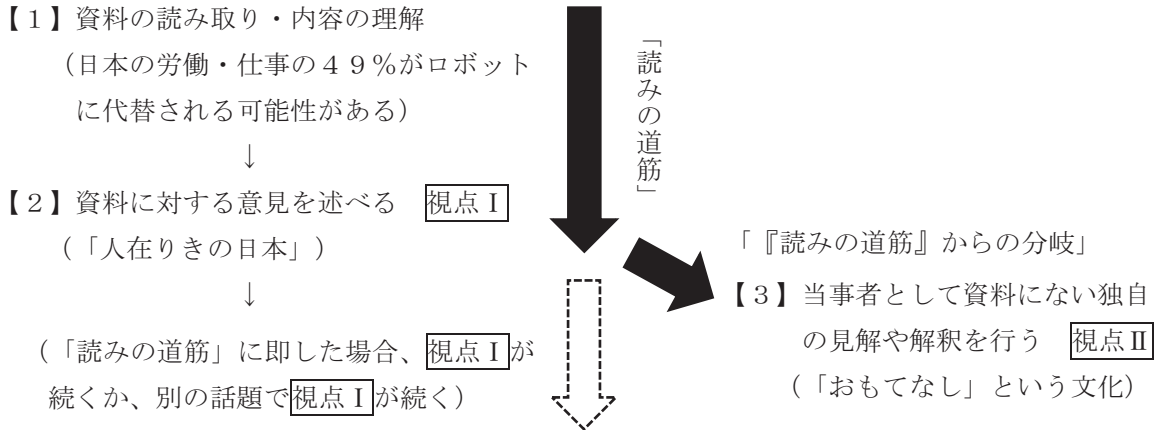
次に引用するのは、先ほど引用したカンファレンスの続きである。話題は「10～20年後に、日本の労働人口の約49%が技術的には人工知能やロボット等により代替できるようになる可能性が高い」との推計を載せる資料イについてである。

| | | |
|---------|--|---------------------------------------|
| 299. Hs | 49%が | 人口知能ロボット＝ |
| 300. 0m | | ＝ヤバー |
| 301. Hs | おいージャパン、ジャパンどうしちゃうのよって話じゃん。ほいでさー日本てっさーなんかも一人、人在りきの日本やん | |
| 302. 0m | ほんとほんと、だっておもてなしできないもん おもてなしがなくなるやん | |
| 303. Hs | おもてなしとか言ってるくせに、ロボットとかみたいな | |
| 304. 0m | hhh | |
| 305. Hs | hhh | |
| 306. Hs | ほん | と、ほんとに、文化××とかさー 着物とかなんかさー紋りとかさーそうじゃん＝ |
| 307. 0m | | ふざけ××× |
| 308. 0m | ＝うんー | |
| 309. Hs | そういうのって全部人在りきで、人間在りきの文化なのには＝ | |
| 310. 0m | ＝うんーロボットが着てみろやーなる | |
| 311. Hs | ロボットがしちやったら、おい文化ってなるやん＝ | |
| 312. 0m | ＝hhh | |

299. Hs「49%が 人口知能ロボット」という発話では、人工知能やロボットに日本の労働人口の49%が代替されることを指摘し、それに対する300. 0m「ヤバー」という発話は、危機感を表したものであると同時に同意の意思表示でもあろう（Hsの発話後に即答していることから同意の意思がうかがえる）。それを受けて、301. Hs「日本てっさーなんかも一人、人在りきの日本やん」と、日本は「人在りき」の姿勢・態度で成り立っているという意見を述べる。ここまでのHsの意見は資料イの内容に即したものとと言える。しかし、この後の0mの「おもてなし」という発話によって、カンファレンスの流れに変化が生じる。302. 0m「ほんとほんと、だって『おもてなし』できないもん 『おもてなし』がなくなるやん」という発話に出てくる「おもてなし」という語句は資料に記述されているものではなく、0mが「人在りきの日本」というHsの発話を受けたものである。つまり、人の仕事が人工知能やロボットに代替されることで、日本にある「おもてなしという文化」が消滅してしまうと考えたのである。

このカンファレンスの流れをもう一度確認しておきたい。最初に資料の読み取りを行い、各自で内容の理解を行っている。次に資料に対する意見を述べている（これを「視点Ⅰ」とする）。その後、「当事者」として資料にない独自の見解や解釈を行っている（これを「視点Ⅱ」とする）。

図にまとめると以下ようになる。



【1】の「資料の読み取り・内容の理解」と【2】の「資料に対する意見」は、資料イの読み取りとそれに対する意見である。ここでは資料が前面にあり、話題の中心として存在しているため資料が示す「読みの道筋」に従う視点と言える (**視点Ⅰ**)。それに対して【2】「資料に対する意見」から【3】「当事者として資料にない独自の見解や解釈を行う」へ移行する際には、資料の存在は話題の前面から撤退し、後方へ移動するようになる。つまり「『読みの道筋』からの分岐」が生じたのである。カンファレンスに即して言えば「人在りきの日本」という発話を受け、ロボットによる仕事の代替が行われると「『おもてなし』という文化」が消滅してしまうと述べるのである⁽¹⁰⁾。この発話(発想)は、資料を基にしたカンファレンス過程で得た着想を持ちつつ、資料から観点を「幅広い話題・抽象的な話題」へと移動させたものだと言える (**視点Ⅱ**)。

5 資料の「解釈」について

ここでは「解釈」をキーワードとして、3つの事象の分析と考察について述べていく。

1つ目は、資料にある用語の解釈を出発点として、それを別の資料に記載されている内容と関連させ、一つのまとまりにして、それに対する新たな解釈を行うこと。2つ目は、資料に記載されている内容を細分化し、それをもとに改めて解釈を行って新たな項目を追加すること。3つ目は、発表者(話し手)に対して異なる意見を述べることでカンファレンスの流れに変化をもたらしたり、話し手の意見に影響を与えたりする「聞き手」の存在について。

5.1 資料の統合・融合

次に引用するのは、別の班(Iy・On・Nt・Sm)の第1回のカンファレンス記録である。

| | |
|---------|--|
| 111. Nt | あと何があるかなあ。ビジネス範囲 難しい これは これは |
| 112. On | ビジネス範囲ってのが、具体的によく意味がわからん |
| 113. Nt | どういこと ビジネス範囲 なんだろう 社会の広さ あったとしたら 会社でAI使うと広く使えるみたいな |
| 114. On | 普段は人間ここに入れてたけど その分が浮くから浮くからその人間を他のところに移せる |
| 115. Nt | そう けど |
| 116. Iy | それって |
| 117. Nt | その中も失ってしまう人がいるよね＝ |
| 118. On | ＝失業者は出てくるよねって＝ |
| 119. Iy | ＝ねってこと |
| 120. On | ここには問題点があるじゃん。 |

「ビジネス範囲」の内容や意味についてNtとOnが意見を出し合い、AIを使うことで社会の広さや会社で仕事の範囲が拡大することになると話題を進める。そして、人間の仕事がAIやロボットに代替され、人間は配置転換やリストラをされ、失業者となる、という結論に達している。

ここでは、112.0n「ビジネス範囲ってのが、具体的によく意味がわからん」という「ビジネス範囲」についての「疑問の提示」を受け、113.Nt「会社でAI使うと広く使える」という「回答・意見」を述べる。それを受けて、114.0n「人間を他のところに移せる」117.Nt「その中でも失ってしまう人がいる」118.0n「失業者は出てくる」と連鎖的に生じる（と予測される）問題点を挙げていく。

このカンファレンスのもととなる資料エでは、「ビジネス範囲」に「AIやロボット」が参入することによって「失業（失業者）」が生まれることやその問題点は記されていない。「ビジネス範囲」について書かれた資料エには「産業経済の面」からの「ロボット、AIに対するニーズ」についての記述がある。また、「ビジネス範囲」についての説明の前にある記述の内容は、「人件費削減のニーズ」であり、失業することや失業者に関するものではない。それならば、117.Nt「その中でも失ってしまう人がいるよね」や118.0s「失業者は出てくる」という発話は、生徒が資料の内容を誤読した、もしくは間違っ読み取った結果なのだろうか。

カンファレンスの流れを再度追ってみると、出発点は「ビジネス範囲」（資料エ）に対する疑問である。そして、ビジネス範囲の広がりや「会社でAI使うと広く使える」と解釈し、カンファレンスを進めている。これは資料エの記述にある「AIやロボットの産業化によって、ビジネス範囲が広がる」という記述をもとにしたと思われる。そして、この資料エの「AIやロボット」という語句に関連させて、資料イの「（労働人口の約49%が）人工知能やロボット等により代替」されることにつながっている。ここでもし、資料イや資料エをそれぞれ別々の内容として扱っていた（発話をして）ならば、それは資料の内容を個別に説明・確認したことにしかならない。しかし、先に引用したカンファレンスでは2つの資料の内容を関連させている。そして、関連させた話題の後に、失業（失業者）が生まれることや失業（失業者）の問題についての発話を続けている。

つまり、カンファレンスの過程で生じた疑問を解決しようとする際に、最初は別々のものとして読んだり、理解したりしていた複数の資料を別々のものとする（扱う）のではなく、複数の資料の内容によって関連付け（リンクさせ）、ひとまとまりのものとして統合もしくは融合しているのである。そのうえで新たな解釈を行っているのである。その結果が、資料には直接記されていない「失業」や「失業者」という語句である。

このことは、生徒が5時間目にしたレポート1「資料を読んで考えた問題点」の清書においても確認できる（下線等は引用者による。以下同じ）。

Iyの清書

AIやロボットを必要とする人の生活が楽になるなど、AIやロボットを用い、ビジネス範囲を広めることが可能であり、人件費を減らせることなどが利点だが、その反面、職を失ってしまう人が出てしまうことが問題である。

Ntの清書

仕事の効率がよくなったり、新しい技術の開発につながるという利点がある。しかしロボットが人の代替ができるようになってしまうので失業者が増えてしまう。

Onの清書

人工知能ロボットや自動運転などにより労働人口が代替わりしたりでビジネスが発達したり人間が

していた仕事をロボットで補うことで人権費がういたり、他の仕事に人を動員できるなどの利点もあるが、AIの発達により文化のある仕事^{マツ}が失われたり、人間がやるからこそいい仕事も失われる問題があり、

文章の長短や語句の差異はあるが「失業」や「失業者」に言及したりする点は共通している。着目しておきたい点は、「だが」「しかし」「が」という「逆接の接続詞」を使用している点である。AIやロボットの発達によりビジネス範囲が拡大することで生じる負の側面、つまり「失業」という問題点を浮き彫りにする役割を担っていると思われる。この論理展開はカンファレンスの過程で資料を統合・融合することで新たに生み出された「読みの道筋」の結果であると言える。

5.2 資料の細分化・再解釈

次に引用するのは、第2回カンファレンスにおける別の班 (Ks, Sh, Ns, Tk) のカンファレンス記録である。ここでは、ロボットによる代替が困難な仕事に関する話題をしている。

67. Ks だから、ロボットなどに代えようがない、たとえば対人関係、えーとね、教師とかあの一人のなんか、気持ちを とらえ
68. Sh とる
69. Ks そうそう
70. Sh 汲み取る
71. Ks 汲み取って あのー仕事をやるやつ
72. Sh 汲み取る
73. Ns 仕事
74. Ks 仕事 仕事をする
75. Ns あーそういうことね
76. Ks で、自分が働くか、ロボットやAIに徹してメンテナンスや
77. Ns メンテナンス
78. Ks エンジニアとしてAIやロボットを支援する、かの二択だと思う。仕事は。
79. Sh まそうですけど。医療関係者も命を預かることをそうだけどね

67. KsがAIやロボットによる代替が困難なものの例として「対人関係」を挙げ、その具体的な職業を「教師」としている。その理由を人の気持ちを汲み取ることの可否とし、その後、76. Ks及び78. Ksで対人関係を伴う仕事かAIやロボットを支援する仕事のいずれかを選ぶと述べている。そして76. Ks及び78. Ksの発話を受けて、79. Sh「医療関係者」という発話へとつながっている。

このカンファレンスの流れで最初に確認しておきたいことは、次の2点である。1点目は「語句の修正」。67. Ks「人のなんか、気持ちを とらえ」を、68. Sh「とる」70. Sh「汲み取る」と言い直しを行っている。2点目は「励ましの言葉 (ナッジ)」。75. Ns「あーそういうことね」は、Ksの発話 (もしくはそれまでの発話も含め) に対する同意や納得と言える。この2点については、木村 (2008) がカンファレンスの過程で生じる事象として指摘していることと同じである。

ここでもう1点着目したいことは、「資料の解釈」についてである。カンファレンスは複数の資料の内容を読み取ったうえで行われている。そのため、発話の背景・前提となるものは「資料」である。そのことを踏まえて、次の2つの発話を再度確認したい。

76. Ks及び78. Ks「自分が働くか、ロボットやAIに徹してメンテナンスやエンジニアとしてAIやロボットを支援する」(途中にある77. Nsの「メンテナンス」という発話はKsの発話の復唱であるため、引用には含めず、76. Ks及び78. Ksを一文として扱う)

79. Sh「医療関係者も命を預かる」

76. Ks及び78. Ksの「自分が働く」は、AIやロボットでは代替困難な「対人関係」を伴う職業のこ

とである。この職業の例として、この後のカンファレンスにおいて教師・カウンセラー、看護師・心理学者が挙げられている。一方、AIやロボットを支援、メンテナンスする仕事ではエンジニアを挙げている。そして「命を預かる」仕事については、この後のカンファレンスにおいて看護師や医者が挙げられている。ここで挙げられている職業の多くは、資料ウ「人工知能 (AI) の発達により、10～20年後に消える仕事・残る仕事 (予測)」の「残る業務」(人口知能・AIによる代替が困難な職業) に記載されているものである。

先の「3.1 批判的な考察」でも述べたように資料ウには「消える業務/低賃金業務」と「残る業務=企画立案・対人関係業務」のそれぞれの職業の名前が記載されているだけであり、消える/残るについての詳しい理由や考察などは記されていない。「対人関係業務」として挙げた、教師・カウンセラー、看護師・心理学者は記載された職業から「選んだ」と言える。しかし、看護師・医者は(大きな枠組みでは「対人関係業務」ではあるが)カンファレンスにおいて「命を預かる」仕事として別の枠組みとして扱われている。つまり、同じ「残る業務」に分類されている職業を職種という観点で細分化しているのである。また「残る業務」には記載されていない「エンジニア」を、「AIやロボットを支援する仕事」として新たに加えている。これは資料の記載内容を細分化したうえで、その内容を解釈し直す(再解釈する)ことで追加された新たな職業だと言える⁽¹¹⁾。

5.3 静/動の聞き手

「5.2 資料の細分化・再解釈」で引用したKs, Sh, Ns, Tkのカンファレンス記録の中で、もう一つ着目したい点は、79. Sh「医療関係者も命を預かる」という発話である。木村(2008)によれば、聞き手の一番の役割は「書き手の話を要約し、問題点を焦点化すること」である。しかし79. Shは、76. Ks及び78. Ksの労働内容の二者択一の内容を要約したり、問題点を焦点化したりするものではない。76. Ks及び78. Ksとは異なる職種(この場合「医療関係者」)を述べているのである。

発表者(=話し手)⁽¹²⁾の意見を聞き、要約や焦点化する役割に徹するのは「『静』の聞き手」と言えよう。それに対して、79. Shのように発表を聞き、それとは異なる意見を述べることでカンファレンスの流れに一石を投じ、変化をもたらす聞き手は「『動』の聞き手」と言えるだろう⁽¹³⁾。

Ksはレポート2「自分自身がこれから身につけるべき力」の清書において次の様に記述している。

Ksの清書

だからロボットなどに変えようがない、知識や社会のルールを教える教師、人の感情をくみとり人によりそい、サポートするカウンセラー、看護師、心理学者命にママがかかわる、医療、消防、警察などがこのころでロボットにたよらずに仕事をする。

カンファレンスでの分類とは少し異なっているが、「命にママがかかわる」職業と記述している点は、79. Sh「医療関係者も命を預かる」という「『動』の聞き手」による発話の影響があったと言える。

6 まとめと課題

本稿では、カンファレンスの対話記録をもとに、書き手に生じる「視点」と「解釈」のダイナミックな変化過程に着目し、複数の類型を示した。しかし、カンファレンスを通して得た知識や着想が「書くこと」や「書き手意識」の形成への影響の及ぼし方について検討することができなかった。この点については、稿を改めて検討したい。

注

(1) 本稿で使用する「資料」は「実用的な文章」を指す語句として用いている。以下「資料」と称する。

- (2) 内閣府 Society5.0 資料 https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/society5_0.pdf (最終閲覧日 2020/12/11)
- (3) 基調講演 2 (鈴木寛 文部科学大臣補佐官) https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/09/11/1407981_02.pdf (最終閲覧日 2020/12/11)
- (4) (3)と同じ
- (5) 木村正幹(2008), p. 122
- (6) 仙田健一(2018), p. 42
- (7) 岡田泰孝・神戸佳子(2019), p. 2
- (8) 「当事者意識」を持つことで「書くこと」へ目が向けられ、意識化(小林ら2018, p. 68)が促される。それによって書き手意識が形成させると考えられる。
- (9) 「『読みの道筋』からの分離」や「移動する視点」については、今後検討を要する用語である。
- (10) 「批判的な考察」の視点さらには「書き手意識」も含めた考察が必要である。
- (11) 「残る業務」の中にある「整備・設備・修理の現場監督」や「コンピューターシステムアナリスト」に着想を得た可能性がある。
- (12) 木村(2008)では、「聞き手」の対義語は「書き手」であるが、カンファレンスの場においては、「話し手」と「聞き手」の二役しか存在しないため「書き手」ではなく「話し手」とする。なお、作文や意見文を書く場合には「書き手」としたい。
- (13) 森(2015)の「主体的に思考する聞き手、さらには批判的・創造的な内面活動を活発に行い、次の機会には話し手へと転じることのできる聞き手」という指摘に通じる考えである。

参考文献

- 遠藤薫(2018)『ロボットが家にやってきましたら… 人間とAIの未来』岩波書店
- 岡田泰孝・神戸佳子(2019)「問題への切実性を表象する『自分事』と『当事者性』という表現の妥当性を検討する」『お茶の水女子大学附属小学校 研究紀要』第26巻, pp. 1-8
- 奥泉香(2012)「視覚化する書記テキストの学習—批判的談話分析とデザイン概念を援用して—」『国語科教育』第72号, pp. 25-32
- 木村正幹(2006)「作文カンファレンスの発話プロトコル法による構造分析—『作文検討会』の導入の試み—」『人文科教育研究』第33号, pp. 45-56
- 木村正幹(2008)『作文カンファレンスによる表現指導』溪水社
- 小林一貴(2018)「書くことの学習におけるコンテキストの複数性と積層性」『人文科教育研究』第45号, pp. 17-34
- 小林一貴・須本良夫・大西祐治・河村美都紀・金井健太郎・山田唯仁・加藤司・則竹真和(2018)「カンファレンスによる書き手意識の形成とメタ言語的理解: 絵画を見ることによる創作の学習過程の分析を通して」『岐阜大学カリキュラム開発研究』vol. 34-1, pp. 61-69
- 小林一貴・多和田仁(2017)「言語的テキストと図表との相互関係に基づく書くことの学習の展開」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究・教師教育研究』第19号, pp. 11-19
- 佐藤広子(2015)「カンファレンス」高木まさき 他編『国語科重要用語事典』明治図書, p. 117
- 仙田健一(2018)「地域の課題に当事者として向き合う生徒を育成する社会科授業」『教育実践研究』第28号, pp. 37-42
- 高橋亨(1991)「源氏物語の心的遠近法」『物語と絵の遠近法』ペリかん社, pp. 9-38
- 森美智代(2015)「能動的な聞き手」高木まさきら編『国語科重要用語事典』明治図書, p. 71